

教室という場の「高瀬舟」

——「オオトリテエ」の受け取り方を中心に——

篠原武志

1 高瀬舟を中学校の教室に持ち込む意義

「高瀬舟」という小説は、通常、高等学校の教材である。しかし、中学校でも「読書」教材として光村図書の教科書に採用され、そこでは、自分の意見を持つことが重要課題とされている^①。しかし、「高瀬舟」とはそのような、読んでいく中で自分の意見を持つことが出来る教材であると共に、それだけに、特に喜助という人物の直接話法を通しては、一見多義的に見える可能性を含むような教材であるとも言える。その中で語りの中からのような〈文脈〉^②を教室という場で抽出し共有しあえるのだろうか。また、中学校の教室という場は「高瀬舟」という作品読解にどこまで有効に機能できるのだろうか。

本校は中高六カ年一貫の男子校（一学年四五人×五クラス）であ

る。他からは進学校という見方をされているようだ。本校では、^③中学生だからこそ、遠慮無くものがいえる空気の中で、やりとりを進めていくことが適当な場合があると考える。ここでは、生徒に書かせた論を中心にやりとりを進め、さらにまた論を書かせるという形で生徒たちが到達していった過程を振り返り、また、「高瀬舟」の教材価値を考えてみる。先走って言っておくなら、喜助の直接話法から喜助の到達した位置を考えさせると共に、作品末の「オオトリテエ」という言葉に注目させることで、喜助と庄兵衛それぞれの権威に対するあり方がわかる。と同時に、読者にとっての権力との関係性が逆照射されるからこそ、この作品の教材としての眼目はあるのではないかと考える。以下の実践は本校中学二年生を対象に二〇〇九年度に行ったものである。

2 喜助の第一の直接話法

竹内常一氏によれば、高瀬舟とはそれまで隠されていた真実が明らかになる場であり、それゆえ、「再審の場」である一方で、権力の側から言えば「ガス抜き装置」でもあったとされる。そして、それは同心にとってこそ、己のアイデンティティが揺るがされるといふ意味で脅威の場所だったとされている^①。それらの言葉は対照的に扱われる「胸」と「役柄」という言葉に注目することによって、生徒にとっても理解されやすい。

では、庄兵衛と喜助にとって、高瀬舟とはどんな場となっていたのだろうか。

時は第二の場面で「江戸で白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃でもあっただろうか」とされる。ここで注目しておきたいのは、語り手が「……でもあっただろう」という推定の表現を用いることである。つまり、語り手は喜助と庄兵衛に関わる話の内容を事後的に「白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃」にあてはめているということになる。それはなぜだろうか。後の生徒のやりとりの記録を通して明らかにしていきたい。

ところで、人物像とは語りの中であり、それだけが単独でとりだせるものではないかもしれない。しかし、生徒にとつては、最初、

人物像という言い方で問いかけてやった方が分かりやすい面もあるだろう。私は生徒に対して、初読時に喜助の人物像について書かせてみた（傍線篠原、以下、生徒の会話、感想部分も同じ）。

喜助の第一の直接話法と関係する物が多かった意見として、次のものがあつた。

① 人生で楽をしたことがなく、常に悲惨な生活を送っている。

苦勞して職をみつけれ一生懸命働いたとしても、口を糊することができないだけで満足していた。牢に入ってから働いていないのに食がもらえて、とても満足していることから、大変質素で物のありがたみが分かる人物である。また人生において踏みとどまることができない人物である。

一読して、これが庄兵衛の認識の部分から引き出されたものであることが分かる。初読時の生徒にとって、喜助の直接話法と庄兵衛の認識とは同じものとして、あるいは庄兵衛の認識は喜助の直話法の正確な要約であると考えられているのである。

ただし、次のような意見もあつた。

② 今までの人生でたくさんの苦勞をしており、住所不定、牢屋

敷と呼ばれる親族はいない。本人の話から今でいうホームレスに近い存在。遠島に対し何の考えもたず、恐れ悲しむのではなく、自分にとっての十分な満足というものをわかまえる事で、足るを知り、遠島に対し希望を見いだすことができる人物。

これは鋭い意見だと思う。喜助を「足ることを知」る人物としてしまう点は、①の意見と同様だが、「ホームレス」という語を用いて、喜助の境遇に注目している。また、次のような意見もあった。

③ 喜助はとても慈悲深い。「世間で楽をしていた人だから」とか「自分のいい所がなかった」などを自分の環境を自負しているように言うことから、世間に憎しみを持っているからではないのかと思われる。

これらの意見を元に、生徒とやりとりをしていった。

T 「時代についてはええね。『白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃』やな。ところで、歴史の先生に聞いたら、ちょうど寛政の改革ってやったところっていうたはったで。そしたら、
歴史の復習な」

S 1 「ええ」

T 「そんな難しいこと聞かへんから。じゃあともかく寛政の改革について知ってるこというてみて」

S 2 「節約令、人足寄場、棄捐令」

T 「なかなか、よう覚えてるなあ。そしたら、節約したら、庶民に行き渡る金銭ってどうなる？」

S 3 「少ななる」

T 「そうやな。庶民の生活は苦くなるわけや。ところで、これはちよつと難しいかも知れんけど、歴史の先生に聞いたら、教えていうたはったで。こういう人足寄場とか棄捐令ってどういう意図で出されたんやったかな？」

S 4 「ええ、難しいわ」

T 「うん、これは、俺も歴史の先生の受け売りなんやけどな。人足寄場とかが浮浪民に職を持たせるためのとこやったんは知ってるな。そういうのも別に浮浪民のため違うて、当時のお『上』は、浮浪民が増えたら都市の治安が悪化すると思うたんやな。それで、なんとか浮浪民を減らすと思うてした政策やったわけやな。棄捐令についてはいうまでもないな。旗本、御家人を守るためやから、めっちゃ都市市民中心、武士中心の政策やったわけやな」

S 5 「先生、それって、前②の意見で喜助が『ホームレス』っていうのと、なんか矛盾せえへん？ だって、そういう政策とりながら、実際に喜助みたいな人がおるわけやん」

T 「そうやな、そういう風に考えたら、喜助の存在こそ、『上』の政治の失敗を示すもんじゃないわけや」

以上のように考えていくと、「白河楽翁侯が政柄を執っていた寛政の頃」に時代が設定されているのは、語り手がその時代を浮浪民（喜助のような立場の人間）が多くいた時代と捉えているからであると考えられる。他方、語り手はそのような時代に喜助という人間を当てはめることで、権力を批判する立場を明らかにしているとも考えられよう。

さて、喜助の第一の直接話法はどう読まれていったか。

T 「前、③の意見で、喜助が『自分の環境を自負している』とか『世間に憎しみを持っている』っていうのあったけどこれってわかる？」

S 1 「うん、わかる。この語り口っていかにも皮肉っぽいっていうか思わせぶりみたいな感じする」

T 「他の人はどうや。喜助の語りって皮肉かな？」

S 2 「う〜ん、そうともとれるけど、皮肉いうつもりはなかったんちゃう」

T 「なんで、S 2はそう思うの？」

S 2 「だって、喜助って、前、最底辺の人っていう話やったやんか。そうしたら、そういう論理みたいなもんって使えんのちゃうかな。僕は無理みたいな気がするけど」

T 「なるほどね、喜助は最底辺の民やからね。他の意見ある？」

S 3 「前、読んだとこで『喜助の様子を見るに、いかにも神妙しきまうに、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬って、何事につけても逆わぬようにしている』ってあったやん。てことは、喜助って温厚で、『上』を敬うような性格なんやから、皮肉っていうのはどうかな」

T 「う〜ん、それは庄兵衛の見方やから、必ずしも正しいとは限らへんのやけど、喜助がそういう様子やったんはそうなんやろね。」

S 4 「それに、『晴やか』っていうのがあったやん。『晴やか』な人が皮肉って言うかな」

T 「なるほどね。まとめてみると、喜助の言っていること自体は皮肉っぽい。でも喜助には皮肉の意図はないってことになるな。じゃあなんで、そんな言い方になるんやろ」

S 5 「今でもそうやと思うんやけど、前、②の意見で『ホームレス』っていう意見あったやん。そういう意見からいうたら、『ホームレス』の人って、それ、苦労してるんやろし、そういう気持ちを正直に言うたら、『自負』とか皮肉みたいになるんちゃうかな。」

T 「そうやね。喜助は最底辺の民やから、生活を正直に言うとその意図はなかったとしても、皮肉っぽくなるわけやね。逆にいえば、それほど、喜助の生活っていうのは苦しかったってことやな。例えば、『鳥はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございませまい』って喜助は言うてるよな。これって逆に言うたら、『鬼の栖む所』はどこってこと?」

S 6 「京都」

T 「そう。そういう言葉も皮肉といえれば皮肉にも聞こえるんやけど、喜助にしたら生活実感やつたんちゃうかな。」

喜助という人物は最底辺の民である。であればこそ、その声は権力にとって「皮肉」とも取れる言葉になる。^⑤もちろん、「晴やか」とされる喜助にその意図はなかったであろう。逆にここでは、そういう声になってしまう立場に置かれた存在こそが喜助であるということを読み取ることが重要だと思われる。

3 喜助に対する庄兵衛の認識を読む

喜助の直接話法と庄兵衛の認識とは、ではどのような関係になっているのか。初読時に庄兵衛の人物像についても書かせてみた。その中で、喜助の直接話法と庄兵衛の認識に関わるものを挙げてみる。

④ 文中にある二種類の同心のうち庄兵衛は後者だ。つまり、役人であることを忘れ、一人の人間として共にその罪人の境遇に心を痛めるタイプである。特に、庄兵衛の場合は、罪人である喜助を役人の庄兵衛が尊敬してしまっている。そこに、庄兵衛にもやさしさがあると思う。

確かに庄兵衛がこの小説で重要な役回りを果たすのは喜助に対して同心の枠を出、様々に話しかけるところにあると思われる。後述するが、それゆえ喜助も庄兵衛に対して様々なことを語るののである。しかし、一方で庄兵衛の喜助に対する理解とはどのようなものだったのだろうか。

⑤ 彼は町奉行所の京都の役人で妻を持つ人物である。妻が密かに里方からお金をもらってきていることを知りながら家族の将

来を不安に思っている。欲がどこまでも続いてしまい満足できない人物である。人の気持ちを自分と合わせて考える人物である。安楽死は罪ではないと考えている。

庄兵衛は確かにこの生徒が書くように「人の気持ちを自分と合わせて考える人物」である。それは他者理解の第一歩かもしれない。

しかし、そこに、他者を「へ私のなかの他者」^⑥化する陥穽も隠れているのではないか。

T 「喜助の第一の直接話法って、後で庄兵衛は『足ることを知っている』ことについていう風に考えてるんやけど、これって『足ることを知っている』んかな？」

S 1 「違うの？」

T 「庄兵衛の喜助のことを『足ることを知っている』って考えるのは喜助のどういう点をいうてんの？ 具体的にいうてるとこを段落ごと抜き出してみて」

S 2 「喜助は世間で為事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさせずれば、骨を惜まずに働いて、ようよう口を糊することの出来るだけで満足した。そこで牢に入ってからは、今まで得難かった食が、ほとんど天から授けられるように、働かずに

得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満足を覚えたのである」

T 「そこで、二回使われてる言葉があるやろ」

S 3 「満足」

T 「その『満足』っていう言葉やけどな、喜助の直接話法ではどうなつた。まず、最初の『満足』は？」

S 4 「貰つた銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたしの工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、また跡を借りたのでございます」

T 「じゃあ、第二の『満足』は？」

S 5 「わたくしはそればかりでも、お上に対して済まない事をいたしているようでもありません」

T 「そうやね。そしたら、この二つの満足ってどうなんやろ？」

S 6 「うーん、二つめの『満足』は確かに、『お上に対して済まない』って言うてるんやから『満足』なんやろうけど、一つめの『満足』はちよつと違うんちゃう」

S 7 「ちよつとつていうか、全然違うと思うで。『銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません』とか、『大抵は借りたものを返して、また跡を借りたのでございます』とか、

庄兵衛が思ってる『口を糊することの出来るだけで満足した』と全然違うと思うで」

S 8 「前、庄兵衛のことを『人の気持ちを自分と合わせて考える人物』っていうのがあったけど、それって違うのかな？」

T 「それは違わへんと思うんやけど、むしろ、そこに落とし穴があつたんちゃうか？ つまり、他人のことを自分にあてはめて理解するっていうのは他人の理解の仕方としては、一番手っ取り早いと思うんやけど、それって、結局あてはめちゃうんやから、自分の枠みたくないもんを出えへんのんちゃうかな」

S 9 「先生、それって庄兵衛が悪い人ってこと？」

T 「いや、そうは言うてへん。むしろ、いろんな人の意見にあつたようにええ人やと思うよ。例えば、庄兵衛って、苦勞してたとと思う？ 反対の人も賛成の人もどっちも意見言ってみて」

S 10 「庄兵衛は喜助に比べたら全然苦勞してへん」

S 11 「前、最初の場面で同心つて下つ端つていう話やつたやん。それ考えたら庄兵衛も七人家族で苦勞してるんちゃうかな」

T 「そうね。例えば当時の同心の給料つて、三〇俵二人扶持やつたつていうんやな。これつて月給で大体一両つてこと。今のお金を直すつて…？ お金の単位については前二百文のところをやつたな」

S 12 「ええつと。確か六万円」

T 「そう。庄兵衛は『初老』やから、そこまで安ないと思うんやけど、それにしても、それで家族七人養うのは大変やつたと思うで。そういう苦勞人やからこそ庄兵衛は喜助のことを自分に重ねちゃう。それに、二人の会話つて、どっちがどっちに話しかけて始まつた？」

S 13 「庄兵衛が喜助に」

T 「そうやな、それに、庄兵衛に話しかけられた喜助はどんな表情してる？」

S 14 「『にっこり笑つた』」

S 15 「あれ、これつて『おにたのぼうし』でもこういうのなかつたつけ？」

S 16 「あつた。女の子とおにたが作り出した男の子のコミュニケーション」

T 「そう。コミュニケーション。そやから、この二人の間にはコミュニケーションがあつたともいえるし、なかつたともいえるんやな」

『おにたのぼうし』のおにたを補助線にすると庄兵衛と喜助の間のコミュニケーションというものが見えてくる。それは決して完全

なコミュニケーションではない。しかし、そこにコミュニケーションの萌芽を見ることは可能であろう。ただし、庄兵衛が喜助を己に引きつけ、「私のなかの他者」化していることも看過してはならない、喜助から見た庄兵衛が役人であることもまた動かしがたいことではあっただろう。それでもそこに、コミュニケーションの可能性は含まれていたのである。^⑧

4 喜助の第二の直接話法を読む

喜助の第二の直接話法は庄兵衛が喜助に対して同心の枠をはみ出して、「さん」と呼びかけるところから始まる。初読時に、喜助の人物像を問いかけたとき、この第二の直接話法に関係するものとして、次のようなものがあつた。

⑥ 弟が死ぬのを自ら望んだからと言って、喜助はお医者さんを呼びたかつたが、やむをえず弟を殺さなければならなかつた。

しかし、ふつうは弟の死を悲しんだりせずに自分の元にお金が入ったからと言って喜んではいられないと思う。よって少し喜助の言うことには真実でないことがあるような人物。^⑨

この生徒の論ではやはり、「その額は晴やかで目には微かなが

やきがある」という言葉は十分注目されているとはいいがたい。また、語り手が、この直接話法で長く喜助に語らせていることも注意すべきだろう。しかし、同時に初読時の感想として、喜助の第二の直接話法を語り手が「喜助の話は好く条理が立っている。ほとんど条理が立ち過ぎていると云っても好い位である」としているのに注目した論といえよう。ただし、実際には、そのすぐ後で語り手は「これは半年程の間、当時の事を幾度も思い浮べて見たのと、役場で問われ、町奉行所で調べられるその度毎に、注意に注意を加へて浚つて見させられたのとのためである」とし、喜助の話に奉行所の権力性が関与していることを示唆していることにも注意するべきであろう。

また、次のような論もあつた。

⑦ いくら頼まれてやったとはいえ、一人の大事な弟を殺してしまつたのに、庄兵衛に聞かれた時も、淡々と話している。それに二百文だけで満足するという欲のなさ。これは弟を殺して、普通の人の感情を捨てたのだと思う。

⑧ 幼い頃から助け合つて生きてきたのもあつて弟思いの兄であり、また残酷な場合をリアルに説明しているので自分の辛い過去と向き合つて冷静に考えられる心の強い人物。

⑦の生徒の意見でも、喜助という人物は理解しがたかったに違いない。そこで考えられた帰結が「普通の人の感情を捨てた」ということであつたと思う。確かに、庄兵衛に対して、自分の弟殺しを（それが「安楽死」であれ「自殺幫助」であれ）⑧の生徒の意見のように、淡々と冷静に語る喜助は「普通」とは言い難いかもしれない。では、喜助とは何者か。

喜助の語りには直接話法のなかに直接話法が入る形の二重鍵括弧で示される部分がある。これは、奉行に対する証拠（授業時の生徒の言葉では「弟の真実の気持ち」として喜助が提示していったと考えられる。同時に喜助の語りは、肝心の、自分が弟を殺した部分「……ように思はれました」「……切れたのでございましょう」と、それまでの弟との会話が断定的であるのに比べるとはなはだ曖昧である。喜助は自分が弟を殺したという認識は持っている。しかし、その認識は、奉行所での取り調べの中で持たされた可能性が高いのではないだろうか。もちろん、これらのことは（二重鍵括弧も含めて）語り手がそのように再話していると考えられるものであり、語り手が読者に対してその機能を働かせていると考える。

T 「じゃあ、健康やつたときの喜助と弟との関係ってどんなもんやつたんやろ。喜助の言葉から抜き出してみて」

S 1 「なるだけ二人が離れないようにいたして、一しよにいて、助け合つて働きました」

T 「そう。そんじゃあ、その頃の二人の生活ってどうやった？」

S 2 「苦しかった」

S 3 「最底辺」

T 「喜助の前の言葉（第一の直接話法）から抜き出すと……？」

S 4 「貰つた銭は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買って食べられる時は、わたくしの工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、また跡を借りたのでございます」

T 「喜助の話から考えてどうや、もうちよつとなんか言葉出てきいひん？」

S 5 「一生懸命働いても食うや食わずや、つてことかな。」

T 「そういうことになるな。そういう状況で弟が倒れたわけや。前、誰かの意見で弟は兄に自分の食いぶちも稼がせるのが申し訳なかつたつてのがあつたけど、この二人の生活ってそんな甘いもんかな？ 喜助つてすでに目一杯働いているわけのはずやから……」

S 6 「二人分の食いぶちは稼げへん。食わずや食わずやになる。」

S 7 「餓死する」

T 「そこまで言っていないかはわからんけど、その可能性も喜助の

弟は視野に入れていたと思うで。そうすると喜助の弟の言う

『どうせなおりそうにもない病気だから、早く死んで少しでも
兄きに楽がさせたいと思っただ』の意味もわかるかな」

S 8 「兄を経済的にちよつとでも楽にさせたいっていうのとちやう
気がしてきた」

S 9 「自分が死ぬから兄には生きてほしい」

T 「そういうことになるな。もちろん、事件の最中は喜助自身が
言うように『全く夢中でいたしました』ことやったわけや
から、後から奉行所で問われる中で思い返して意味づけされて
いったものなんやろうけどな」

喜助の弟の死は、喜助を生かすためこそあつた。そのことが読
み取られて、初めて、喜助の弟の目が「怨めしそう」から「晴や
か」と変化する意味も明らかになるだろう。「怨めしそう」であつ
たのは決して、死にきれない苦しさのためばかりではない。兄に自
分の気持ちがあつてもうええ苦しさであり、「晴やか」な目と
は兄に自分の望み（兄のために死ぬという）が受け入れてもらえた
喜びであつただろう。少なくとも、事後の喜助にそのことはわかっ
ていたはずである。もちろん、そうしたこともまた、喜助の弟の目

教室という場の「高瀬舟」

への理解も含めて、事後的な理解であり、その意味で、弟や過去の
自分を「（私のなかの他者）」化しているのだが。しかし、喜助のそ
の理解は、喜助の中で自分の死罪をも覚悟して昇華されたものであ
るともいえよう。喜助自身がそのことを知るからこそ、今「晴や
か」な境地にいるのであろう。それは権力を無化してしまうもので
あり、喜助とはその存在、語りによつて権力に対する反措定たりえ
ているのである。

5 おわりに

さて、こうした、授業をふまえて、まとめの論を書かせた。問い
は「高瀬舟」とはどのような小説か」というものである。そのと
き、喜助の弟殺しによる変化、庄兵衛の喜助との会話による変化、
「オオトリテエ」という外来語の使用については注意を促した。幾
つかをあげる。

⑨ 喜助は自分の手で苦勞を共に分かち合つてきた弟を殺してし
まい、もう何もないから死罪になつたつて構わないと思つてい
たが、遠島になり、町奉行所で調べられる中で、弟がなぜあの
時、死のうとしたかが少しでも分かつたのだろう。そして、今
まではほとんど、感じられなかつた生きる希望のようなものを

彼は見出し、「晴れやか」という語り手の表現に繋がるのではないか。

しかし、庄兵衛というのは、あくまでも権力の一部である。だから、この喜助の様な権力と真裏に位置する最底辺の話を理解し切れているわけではなく、それゆえに、権力と対峙する意見を持つことが出来るのであろう。

また、末尾で、「オオトリテエ」という外来語が使われているが、庄兵衛は喜助の話を聞いて、今までは持ったことすらなかったであろう「権力との対峙」という考えが生まれている。

だが、この「権力」というのは、庄兵衛にとって何か分らない、あえていえば奉行というレベルの理解しかできていないのではないか。だからこそ、あえて、「オオトリテエ」という外来語で表すことにより、その気持ちを表したのではないか。

⑩ 喜助が「晴やか」としている境地は、自分の目的を見つけた、目的を果たした、そのときの喜びなどではなく、目的を見つめる、目的を果たす時にでた犠牲への悲しみ、それを上回ったものが「晴やか」と書かれていると思う。庄兵衛は不十分な理解で終わっている。喜助の立っている境地は権力だけの浅い考えではどうも動かしきれないようなどころだ。

喜助は弟を殺したことによって、今まで自分が歩んできた人

生とは大きく違う人生を歩むことになる。それを喜助は気づきながら、弟を殺した。

庄兵衛は喜助と話して、心を動かされている。上の判断に少しずつ疑問を持ちはじめている。

庄兵衛の悩んでいることを昔の出来事だからべつに今は全然関係ないなどと思わずに、庄兵衛のいだいた疑問、これ comes 来の人達にも忘れずにいってもらい追求して欲しいということが「オオトリテエ」という言葉の「語り手」の意図なのではないか。

「オオトリテエ」という外来語は庄兵衛の心中表現に対して用いられている言葉である。そこに注目すると、よくいわれるように権力機構の問題が近現代まで続くことだけを示しているとは言い難いだろう。庄兵衛が出会ったもの、それがいわば初めて出会う大きな存在、得体の知れない存在、他者だったからこそ「オオトリテエ」という言葉は使われたのではないか。そして、そのような他者との出合いは喜助との会話によって庄兵衛の中に生じるのである。庄兵衛は、結局それを「奉行」という「私のなかの他者」へと回収していく。それでも、庄兵衛の中に「腑に落ちぬ」という疑問は残り続けるのである。

また、喜助は弟を殺した（という認識を持つ）^⑬ ことによって、今までとは異なる境地に達したに違いない。それは⑩の生徒の言うように、「（弟の死という）犠牲」によって「（生きるという）目的を見つけ」た境地であろう。それ自体、権力を問題にしないし、権力を無化してしまう境地ともいえる。だが、それは単に前近代的封建

道徳的な兄弟愛だけなのではあるまい。喜助は（特に第二の直接話法では）決して庄兵衛に対しても罪人と役人という立場を崩してのコミュニケーションはとっていないともいえる。それは孤独な姿とも思える。しかし、喜助とは「（弟の死という）犠牲」によって「（生きるという）目的」を果たすために、あえてそのような孤独を引き受けていく存在であるとも言えよう。喜助にとって、弟を殺した後に残ったものは徹底した孤独感だったであろう。それを引き受けつつ、自分の過去を読み、弟を読んだ結果として、弟の願いのゆえに、「（生きるという）目的」に向かうのが喜助なのである。そうしたことと重ね合わせて、「晴やか」さは読み取られるべきであろう。もちろん、権力はその両者を乗せた高瀬舟を押し流していく。だからこそ、「次第に更けて行く臘夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべって行った」という末尾で、「沈黙の二人」とされ、「黒い水の面」とされるのだろう。

しかし、そのことは反転し、読者に権力構造の持つ問題とどのよ

うに「対峙」するかを迫ってくる末尾であるとも言える。最後に、もう一度、今度は感想として書かせた生徒の文章をあげ

⑪（前略）この権威・権力の問題は主に政治においてのことだが、この問題は現代社会のいたるところで起きていて、僕もこれからこういった権威・権力の問題に出会っていくことになり、庄兵衛のように考えることになるのではないかと思った。

これは、生徒にとつての単なる実感とも言える。しかし、権力をみつめ、自分が権力構造の中に取り込まれることをも視野に入れた感想であると同時に、権力構造に取り込まれざるを得ない自己を批評したものであるといえよう。^⑭ 単なる知足、安楽死にとどまらない感想を持ち、作品を批評することで、自己を批評することこそ語り手が機能として要求していることであり、そこに到達させることで、自己をメタレベルから見させるところにこそ、「高瀬舟」の教材価値はあるのではないかと思える。

世界とのつながりが失われているという現代^⑮において、教室で掘り起こす〈文脈〉が、庄兵衛にとつての喜助という他者、喜助にとつての自分の過去や弟という他者を考えることとなり、世界とのつ

ながりを回復するための場となるのではないか。

注

- ① 「高瀬舟」〔中学校国語 学習指導書 3上〕、光村図書、一九九七年二月、二六二頁。
- ② 須貝千里氏は学習指導要領における「目的や意図に応じ、文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力を身につけさせる」という項目について、「目的や場面に応じ」が指導事項となり、そこから、逆算して学習が考えられることで、学習対象の〈文脈〉が看過されると述べておられる〔『「霊退治」の時代へ―国語のため』に「国文学解釈と鑑賞」、二〇〇八年七月〕。私も〈文脈〉が裁断され、断片化した「文脈」に対する答えを見つけようとするような正解到達主義的な国語教育をしばしば耳にする（例えば石垣りん「先生と詩」『焔に手をかざして』、ちくま文庫、二〇〇一年一月、九九頁）。
- ③ 本校では、高校三年生でかなり受験を意識した正解到達主義的な教育が行われるが行われることが少なくない。そうした授業に対するアンチテーゼとしての授業をこれまでに報告した。例えば、拙論「『舞姫』授業とフオーアアップ試験―生徒の「論」を交差させる試み―」『同志社国文学』、二〇〇六年二月。
- ④ 竹内常一「〈再審の場〉としての『高瀬舟』」（『読むこと』の教育―高瀬舟、少年の日の思い出」、山吹書店、二〇〇五年三月、五五頁）。
- ⑤ 喜助が自己の境遇を語ることが（喜助にその意図はないにしろ）皮肉ともとれるということについては、齋藤知也氏の実践に多く教えられた（齋藤知也「状況に切り込む文学教育―森嶋外「高瀬舟」をめぐる」『教室でひらかれる（語り）―文学教育の根拠を求めて』、教育出版、二〇〇九年八月、一五八頁の発問や生徒の発言などによる）。

- ⑥ 田中実「『読みのアナキー』Ⅱ『還元不可能な複数性』を超えて」『小説の力―新しい作品論のために』、大修館書店、一九九六年二月、一九頁。
- ⑦ 「おにたのほうし」の授業については拙論「中学一年生と読む『おにたのほうし』―おにたの世界からの脱出を求めて―」〔『日文協国語教育』、二〇〇九年二月〕を参照頂きたい。「おにたのほうし」で、実はおにたに「女の子」と母親との「社会」が見えておらず、庄兵衛に喜助兄弟の究極的な「愛」の形が見えていないという点も共通する点であろう。

⑧ 喜助と庄兵衛の間にコミュニケーションの可能性があったということは喜助以上に庄兵衛にとって重要であったと考える。それは、生徒の次のような論につながる。

⑫ 「高瀬舟」において庄兵衛と喜助はそれぞれのような人生を送ったのか。庄兵衛は最後に喜助によって動かされ、疑問を残す。しかし、それはオオトリテエに聞きたいものの、実際には聞く事が出来ない、つまりやり場のない疑問なのである。そうして、自分の働いている幕府の公務員のような職業である同心という立場や幕府自体に大きな疑問を抱いてしまった庄兵衛は少なからず同心をやめようと思ったと思う。しかし、本文からもわかるように庄兵衛は同心をやめることに怖れをも抱いているだろう。その板挟みの状態で庄兵衛は生きていくのだろう。（後略）

この生徒が指摘しているように、庄兵衛は同心という職業と、「オオトリテエ」という庄兵衛が初めて意識したのである。他者に対する疑問の間で板挟みにならざるを得ないのである。そのことは喜助という他者とのコミュニケーションによって起こっているであり（それが「私の

なかの他者」化されるものであっても、それゆえ、庄兵衛にとって、この高瀬舟という場におけるコミュニケーションは看過できないのである。可能性としては、庄兵衛が今後、(例えば、こうしたコミュニケーションションを重ねながら)変容する可能性も(そのように最後の感想で書いた生徒もいたが)全く消去することはできない。

⑨ この生徒の考え方は出原隆俊氏の考え方に大要似ていると思う(出原隆俊『高瀬舟』異説『森鷗外研究』一九九九年一月)。出原氏の考え方は、喜助に対して「自分が殺害した行為を、弟の自殺の補助Ⅱ(安楽死)として装ったのではないか、という疑い」を持つというものである。これに対して角谷有一氏は「読者は、喜助の『弟殺し』に関わる告白を聞くことによつて庄兵衛が理解し、納得した今の喜助の『晴れやかに』『楽しそう』な様子を見せている内面をこそ読まねばならない」とし、そこに「生への執着」を捨てて弟によつて願われた「生」を、自分が心の中で受け継いだ弟の意志とともに生きようとする「姿を捉えておられる(角谷有一「プロットの読みを深める」、田中美・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』教育出版、二〇〇一年六月、一五八頁)。私も同意見である。ただし、そうして喜助の認識もまた「私のなかの他者」であることには注意を喚起しておきたい。言い換えるならば、全ての過去は他者であり、それが認識となつた瞬間に「(私のなかの他者)化される。喜助もまた、「私のなかの他者」として過去の弟との目を再構成して理解し安息しているには違いないのである。しかし、それは、後述するように徹底した孤独感を経て「愛」として昇華されたものであった。さらにいえば、兄弟愛を初めとする「愛」もまた「私のなかの他者」の中にしかないのである。

⑩ 竹内常一「対話と話法—喜助の語りを読みひらく」(注②前掲書)、九三頁。

教室という場の「高瀬舟」

⑪ 田中美氏はこのことを「今まで在った現実的世界を逸脱し、弟とともにある超現実美の生を生きることにまつた」とされている(田中美『高瀬舟』私考『日本文学』一九七四年四月)。

⑫ この生徒の論は、前時の「喜助の弟は、喜助を鳥送りにして最底辺の生活から救うためにわざと自殺補助をさせたのではないか」という意見を受けている。一見、⑨の生徒の意見とは異なるようだが、読みの方向性は大きく異なっていないと思われる。

⑬ 齋藤知也氏は「喜助の弟に対する行為そのもの」は「文化共同体の価値観あるいは法を超えている」とされる(注⑤前掲書、一七〇頁)。しかし、私はそれは「語り」となつた瞬間に、認識あるいは物語化されたものとなり、「私のなかの他者」となると考える。喜助の「行為」が「語り」の中にしかない以上、それは単体として取り出すことは出来ず、実体化することも出来ないのではないか。問えるのは「語り」から取り出せる認識だけなのだろうかと考えている。ただし、付け加えておけば、喜助のそのような認識は、奉行所で問われるなかで思い返して意味づけられていったものであつたにしろ、弟の死という「犠牲」の上になり立つた生という思念によつて意味づけられたものであり、それは⑩の生徒のいう「権力だけの浅い考えではとうてい動かすことができないようなところ」へ達しているのだと考える。

⑭ 丹藤博文氏は次のように述べておられる。

庄兵衛の視点を超えて、喜助を読む。そのことで改めてわれわれの隣人である庄兵衛の問題を前景化する。そのような作品の構造化によつて、「高瀬舟」の読みの地平が拓かれてくるのではないか。構造化することによつてこそ、「権威への批判」というより、さらに〈近代化への異議申し立て〉、あるいは〈近代化批判〉という読みの地平を拓くことができるのではないだろうか(丹藤博文『読みの

地平を拓く』―『高瀬舟』の構造化』、『月刊国語教育』、二〇〇四年一月。

この作品において、「喜助を読む」ことが「改めてわれわれの隣人である庄兵衛の問題を前景化」するということや、この作品が「近代化批判」であるという点に関して、私は同意する。しかし、そのような「近代化批判」とは語りを読み、その語りが読者に反転することによって、初めて可能となる読みであると考えられる。授業論として、生徒にどこまで要求するかは難しいが、ある部分から生徒自身の論のやりとり、相互の影響を視野に入れて指導することが必須であると私は考えている。また、それは、生徒に「権力」とは「定型」のものではなく、「不定型」のものであることを自ら意識させることにもつながるだろう。そこを彼ら自身の力で経させねば、「近代化批判」など成り立たない。

⑮ 小原信氏は次のように現代社会のケータイで連結する若者像について述べておられる。

狭い「われ」の世界には欲望充足のための熱意はあるが、他者だけでなく、自分に対しても積極的な働きかけが減少しがちである。その結果、自分の関わる対象にひどいかたよりが生じる。というも自分にとっていやなもの、面倒なもの、知らないものはほとんど無意識のうちに冷酷に排除して省みない生き方が基本になってしまうからである（小原信「情報社会のパーソナル化」、『iモード社会の「われとわれわれ」―情報倫理学の試み』、中央公論社、二〇〇二年三月、二七頁）。

※授業では光村図書『中学校国語3』を使用した。ここでの本文の引用は筑摩書房、文庫版森鷗外全集5『山椒大夫 高瀬舟』によった。また、ここでの教材論的部分の多く（特に「5おわりに」の部分）は授業後、

生徒の言葉や書いたものに触発されて考えたものである。また、本稿は、日本文学協会第三十回研究発表大会（二〇一〇年六月二六日 於 フェリス女学院大学）での口頭発表を下に行っている。席上、また会の後でご意見を賜った多くの方々に感謝する。